http://hokkaido-poland.com/

POLE

第103号

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2021.5.1

『Exodus/エクソドゥス』プロジェクトの成果と今後の協力の展望

ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」団長
ズビグニェフ・チェルニャク

「シロンスク」舞踊団はポーランド民族文化を伝えるアンバサダーとして、昨年末、日本において「インスピレーション溢れる舞踊～フォークロアから現代へ」と題するプロジェクト――ポーランド文化普及促進の革新的なアプローチであるダンスパフォーマンス『Exodus/エクソドゥス』*を披露しました。当プロジェクトはポーランド文化・国家遺産省の助成事業「インスピレーションを促す文化」として認可を受けました。

元々の計画では日本のいくつかの都市で公演を行う予定でしたが、新型コロナウイルスの世界的感染拡大のためツアーは中止になりました。公衆衛生上の規制のためプロジェクトの実施形態の変更を余儀なくされ、いろいろ工夫して動画鑑賞会とインターネット配信を実現することができました。上映イベントは聴衆の人数を制限し、厳しい感染防止策を講じて行なわれました。

このような困難な状況にもかかわらず、『エクソドゥス』および、その欠かせない一部であるポーランド民族舞踊ワークショップ（振り付けレッスン）録画は、日本のパートナーの間に大きな関心を呼び起こしました。こうした特上のご協力のおかげでポーランド文化とフォークダンスは日本の聴衆に広く受け入れられる機会を得たのです。

ダンスパフォーマンス『Exodus/エクソドゥス』は多様な文化の特別な出会いであり、「シロンスク」舞踊団の作品からインスピレーションを得たさまざまなタイプのダンスと音楽のショーです。創作を手掛けたのは国立民族合唱舞踊団「シロンスク」の振付師でバレエディレクターのミハウ・ズプコフです。彼は世界的な名声を誇る作曲家ヴォイチェフ・キラルの音楽の内容とそこに含まれるさまざまな感情に基づき、人生を、幸福や、人の欲望の実現、他の人間との親密な絆を求める旅として描き出しています。

ダンスパフォーマンスはシロンスク・ロズバルク劇場の舞台とポーランドの野外空間で実現され、豊富なヴィジュアルアートの要素が加えられています。

『エクソドゥス』プロジェクトに含まれる歴史的意味も強調するべきです。

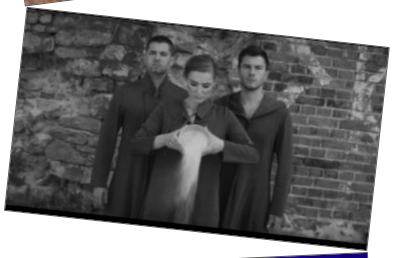
本作は100年以上前の出来事――1920~22年に日本政府と日本赤十字社の尽力により800人近いポーランド孤児が内戦で破壊されたシベリアから救出されたことからもインスピレーションを得ています。日本の支援により子どもたちは敦賀港と大阪港から上陸し手厚い看護を受けました。

また本作は、主にポーランドから逃れてきたユダヤ人に、日本政府の再三の指示を無視して 4000通超の日本通過ビザを発給したリトアニア・カウナス駐在日本領事代理杉原千畝の物語にもインスピレーションを得ています。ポーランド孤児と同じように、多くのユダヤ人が敦賀港から日本に到着しました。最初の動画鑑賞会が同市の人道の港敦賀ムゼウムで行なわれたのは、そのためです。

2019 年にポーランド・日本国交樹立 100 周年が祝われたことが、プロジェクトを巡るこうした活動の適切な背景となったのも確かです。

パートナーのみなさまの多大なご支援とご尽力により昨年、以下の場所で『Exodus/エクソドゥス』動画鑑賞会が催されました――2020 年 11 月3日、

* https://www.youtube.com/playlist?list=PLBS8QnZswkMlZNdcHius56zBmqpyJcQQV



人道の港敦賀ムゼウム(リニューアルオープン記念行事の一環)、9日、東京・シアターX(カイ)(ポーランド広報文化センター協力)、21日、札幌エルプラザ(北海道ポーランド文化協会定例総会と併せて開催、参加者29人)、29日、東大阪市文化創造館(日本・ポーランド民族舞踊友好協会主催)、同日、瀬戸内市民図書館(Polish Art and Science Mission in Japan主催、ポーランド文化ウィークと併せて開催)。

動画鑑賞会に併せて、専門家やポーランド文化普及に携わる人々による講演やプレゼン、写真展、ポーランドの伝統を紹介する本やグッズの展示も行なわれました。

コシェンチン市の「シロンスク」舞踊団のダンス教師たちがアレンジして録画したポーランド民族舞踊(ナショナルダンスとリージョナルダンス)ワークショップは動画鑑賞会の欠かせない一部です。それはポーランド文化との豊かな出会いを創り出し、特に日本のフォークダンス愛好家にとって大きな教育的価値をもたらしました。

本プロジェクトで、ポーランド文化の普遍性と世界文化遺産の構築におけるその役割を示すことができました。伝統芸術と現代アートを結びつけて、さまざまな文化の相互浸透という現象をよく示しました。また、コンテンポラリーダンスとフォークダンスを一つにまとめ、ダンスパフォーマンスと、ナショナルダンスおよびリージョナルダンスを並べて置くことは、伝統文化が、ダンスと音楽の国際的コミュニティを統合する要素として、時代を超えた重要性をもつことを示す優れた形態となりました。

日本で長年にわたりポーランド文化普及を進めてこられた諸団体と多くのポーランドダンス愛好家のみなさまの役割を強調し高く評価したいと思います。

「シロンスク」舞踊団は、日本でショーの企画に携わってくださったすべてのプロジェクトパートナーにこの上なく感謝しています。世界的感染拡大のため制約の多い時代に、多くの親切な素晴らしい方々のおかげでプロジェクトは実施されその目的を達成しました。舞踊団に対する感謝の言葉とポジティブな感情に満ちた評価から、プロジェクトは大成功だったと結論することができます。

公衆衛生上の規制がない時代になれば、これはさらに大きなプロジェクトの出発点となると確信します。

「シロンスク」は、これまでに得たこの共通の経験を日本でポーランド文化を促進するために利用することが有益だと固く信じています。「シロンスク」の豊かな芸術的成果を含む、ポーランドダンス普及への協力、およびこの目標達成を目指す日本のポーランドダンス愛好家の活発な活動は、特に強化する価値があります。

「シロンスク」は、その教育的潜在能力を活かして、さまざまな形でポーランドダンスの普及を支援する用意があります——日本で開催される可能性のある、特に学生と若者のためのワークショップにインストラクターを派遣し、舞踊団の主催するサマーアートスクールに日本のフォークダンス愛好家を迎えることができます。

舞踊団は、フォークミュージックやナショナルミュージックだけでなく、クラシック音楽や宗教音楽、舞踊団が参加して制作されたポーランドに関するプログラムなどのコンサートの録画と日本語の解説を、パートナーのみなさまに無料で提供できます。

舞踊団は、日本のパートナーからの新しい分野や形態での協力に関する提案や、日本のパートナーが主催する事業への参加も歓迎いたします。

パートナーのみなさまとより定期的で系統立ったさらなる協力の形を確立することは、間違いなく、日本においてポーランド文化をもっと豊かに提供することに貢献し、この普及活動の質と効果を向上させ、長期的にみて、日本とポーランドの文化協力を発展させると信じます。

最後に、北海道ポーランド文化協会のこれまでのご協力に感謝し、今後の協力の発展を願うとともに、会員とそのご家族のみなさまのご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

(Zbigniew Cierniak, Dyrektor, Zespół Pieśni i Tańca „Śląsk” im. Stanisława Hadyny, Mirosław Błaszczak&安藤厚訳)

ダンスパフォーマンス『Exodus/エクソドゥス』*

頌歌（しょうか） ode オード

長屋 のり子

私は激しく息を呑みました
私の眼は目瞬くことを
　やめました。
それで私は耳殻すらも
　澄ませて
ビデオ画面に
　吸い込まれていたのです。
そうして私は
私は「舞踏する言葉」を
　聴いてしまったのです。
ポーランド国立民族
　合唱舞踊団の
皆さん。あなた達の、
　あなたの舞踏は、
間違いなく　美しく深い
　「言葉」でした。
踊るあなた達は
視覚的に　緘黙を
貫いているというのに
無辺宇宙への
詩の、
哲学の、
思索の、言葉を
放ちつづけていました。
旋律のように
矢のように。
それは実に繊細で
多様で多弁で
多彩でした。
めくるめく広遠さでした。
いえ、舞踏そのものが
銀河系宇宙、
　である一瞬すら
観客の私は把えたのです。
踊るあなた達の
関節が一瞬止まり、
その球関節が
次の所作への
骨の羽を広げる
瞬間の、それは、
東洋の、日本の、
伝統芸能、“能”
（その三歩の歩みが
宇宙そのもの…と
言って憚らない、
あるいは世界の断ずる…）
あるいは人形浄瑠璃の
暗赤色の光彩を
鮮やかに放ちました。
真に、まっすぐに
　誇らしい
　　シンクロナイズ！の
感得でした。
精密にシーンを
　辿れば
窓　窓　窓　window window
　window
格子　格子　格子
　frame frame frame
あれは生者と死者の
　希望と絶望の
相貌の早送りでしょうか
ポーランド民族の
誇らしい、美しい顎際立って。
　意志の顎！意識の顎。

茫漠とした砂漠で
（あれは砂丘だった
　　かもしれない。
あるいは　あるいは
沼のさざ波
　湖のさざ波だった
　かもしれない）
いずれにせよ　道も道標も
ない荒寥の場所で
あなた達は踊る
詩劇のように踊る
無言劇のように踊る
あなた達の明瞭な
激しい呼吸音の中に
私は聴いた
舞踏という星の
　発した言葉を。
舞踏が砂浜に
　堕とす軌跡。
言葉と言葉の影の
　圧倒的な噴出。
砂漠から巻きあがる
　精霊　魂魄
精霊踊る
　魂魄踊る
精霊踊る
　魂魄踊る
あなたが　あなた達が
言葉を肉体で描いて
　いるのを知るのです。
私は歓喜に
　満たされました。
舞踏という
　銀河系宇宙の中で
あなた達の肉体は
きわめて　きわめて
極めて　極めて自在で
自由奔放な
空間構成を持つ
建築体、そして　そして
　結晶体
であることがまざまざ

* https://www.youtube.com/playlist?list=PLBS8QnZswkMm8_TwgXEpFq9AdHP0_hjBU

知れて　芳しい
　陶酔をもたらしました。
あなた達の舞踏は
世界の沈下　固着化
不自由を　端的に
ひと思いに　突き刺し
突き破り、
優雅に　熾烈に
典雅に　大胆に
すくっと　鮮烈に
世界の中心に
　立ちつくしてみせ
精霊の一化身で
　あるかのように
　権現である如くに
新たな肉体の動きを
私の現前に　眼前に
　峻烈に見せつけました。
これほど　B・G・M は
音楽は鳴り響いて
　いるというのに
音もなく　音もなく
　音もなく
静かに　静かに　静かに
　魂魄　踊る
　精霊　踊る
あなたは　あなた達は
舞うのです。
フランスの永遠の美青年
ジャン・マレーのような
精悍な顎引き締めて
輪舞すらも
群舞すらも
彗星の肉体で
　舞うのです。
時に　即興舞踏のように
時に　様式舞踏のように
手の舞踏を
肩の舞踏を
背の舞踏を
踊り切るのです。
舞い尽くすのです。
白い氷の炎を
背景に　あなた達は
まず、小さな
　赤い“点”でした。
あれは死の床に
横たわる者達
　だったのでしょうか。
あれは母親の胎内に
　眠る者達で
あったのでしょうか。
息詰めて
　耐えて　耐えて　耐えて
うずくまる　あなた達。
　やがて
平面は自らの力で
　起ちあがり、
翻り　翻り
自らの火で　炎のように
　燃えたちます。
輪舞は　生への、
　生きることへの
謳歌として
私の耳核を　視覚（核）を
　揺るがせました。
聴こえない歓声が
　怒涛として
鳴り出しました。
白い衣裳の流動
赤い首飾りは外され
赤い首飾りは外され
　水琴窟へ
　水琴窟へ
古いトランクを提げた男
大きな四角のバッグを
　抱えた女
あれは愛を運ぶ
　死者の足どり
あれは愛を探がす
　死者の戸惑い
超詩的、暗示的
　世界が
光速で、そして静謐に
私に運ばれました。
舞踏は
　激しい熱です。
夥しい　眩しい　熱量で
　舞踏言語は
　舞踏言語は
私に届きました。
あなた達は
　あなた達は
今日、深遠な
　“鳥”でした
踊り終えて
あなた達の類い稀な
美しい腕は
まるで大きな
　羽のように
　決意のように
折り畳まれました。
奇蹟的な羽音でした。
永遠への透過。
私は激しく身震い
　しました。
いずれにしても今日
あなたは、あなた達は
宇宙の　繊細な
　内部を
あなたは、あなた達は
自らのその肉体の隅々までを
　切り裂いて
その純粋な内部を
　見せてくれました
至上の稀有な
肉体言語との
　遭遇でした。

あゝ、ポーランドの
　真摯に　清浄な
舞踏家達よ
完璧な求道者達よ
無比な洗礼者達よ
　幸いあれ
　幸いあれ

（ながや・のりこ、本会会員）

（2020.11.21 代読:熊谷敬子、舞踊:若松由紀枝）=背景写真=

アイヌ民族とポーランド人

現代ポーランドと日本に

ピウスツキは何を遺したか

〈ウェブセミナー〉

先川 信一郎

The legacy of Bronisław Piłsudski in contemporary Poland and Japan と題するウェビナーが 2020 年 12 月 18 日開かれ、アイヌ民族研究の先駆者として知られるポーランドの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ（1866~1918）の今日的な意義や、アイヌの人たちの先住民としての権利について、日本とポーランドの関係者が熱心に意見交換しました。

共催：ポーランドの現代舞踏劇団「アマレヤ」/CEMiPoS（環境とマイノリティー政策研究センター）ほか
後援：北海道ポーランド文化協会

ポーランドからは「アマレヤ」代表のカタジナ・パストゥシャクさん=上写真下左２=、元駐日ポーランド大使でユゼフ・ピウスツキ博物館学芸員のヤドヴィガ・ロドヴィッチ＝チェホフスカさん、AGORA Publishing House 編集長のパヴェウ・ゴズリンスキさん、クラクフの日本美術技術博物館 Manggha 副館長のカタジナ・ノヴァクさん、日本からはアイヌ女性会議代表の多原良子さん、北海道新聞編集委員の小坂洋右さん、および高知工科大学の先川が参加。CEMiPoS のマシヤット・ザーマン研究員=中右２=と丸山博所長（室蘭工業大学名誉教授）=中左２=の司会、２人のポーランド人の通訳で進められ、フェイスブックのライブストリーミングを通して世界に配信されました。*（ライブ視聴約 60 人、2021/4/15 現在 再生 2,015 回）

ウェビナーでは、まず先川=上左２=が「B・ピウスツキはアイヌ民族とポーランドのミッシングリンクをつなぐ存在である」と指摘し、両国の研究者の協力により、1977 年にアダム・ミツキェヴィチ大学で見つかったピウスツキのロウ管から、樺太アイヌ語などの音声の復元に成功したことを説明しました。

小坂編集委員=中左１=は、狩猟、採取、漁労、交易をしていた 850 人の樺太アイヌの人たちが、1875 年の樺太千島交換条約を契機に対雁に強制移住させられ、日露戦争後に南樺太が日本領になると樺太に戻ったものの、1945 年に旧ソ連軍の占領で日本に再移住させられた経緯を解説しました。

そのあと小説『熱源』で直木賞を受賞した作家の川越宗一さん=右写真=がビデオメッセージを寄せて「実在した樺太アイヌのヤヨマネクフ（山辺安之助）とピウスツキを描くことで被支配者が困難の中でも生き延びたモチベーションについて考えたかった。このような運命をたどった人たちを広く知ってほしい」と語りました。

また多原さん=上右１=は、北方領土ビザなし交流で 2019 年5月に色丹島斜古丹を訪れアイヌ民族の墓標の前で初めて供養を行ったことを報告。北千島アイヌが 1884 年に色丹島に強制移住させられ、1945 年には旧ソ連軍に島を追われるなど、日本とロシアに翻弄された祖先の過酷な運命を振り返りました。

ゴズリンスキさん=下右２=は自著『Akan』に「ピウスツキとアイヌ民族、ロウ管だけでなく、植民地主義、思想的背景など複合的な内容を現代の問題として盛り込んだ」と明かしました。

続いてロドヴィッチさん=下右１=が、ピウスツキについて「記憶とインスピレーション」を語ることが重要だと指摘し、その著作や研究論文の刊行が近年両国で増えていることを歓迎しました。さらに「兄弟がたどった数奇な運命や、女性の視点からピウスツキとチュフサンマがなぜ別れたかについて深く知りたい」と述べました。

ノヴァクさん=下左１=は、1999 年に第3回ピウスツキ国際会議と展示会がクラクフとザコパネで開かれ、マイェヴィチ教授やクチンスキ博士らが研究に重要な役割を果たしたこと、2017 年には Manggha 館一行が道内各地のアイヌ関係の博物館を訪問調査し、2018 年にも Manggha 館で第4回国際会議と展示会が催されたことを紹介しました。

あっという間に3時間が過ぎてしまい、結論から言えば、ピウスツキを介して双方の「連帯」を確認し、協力を誓い合ったウェビナーでした。

早くコロナが収まり「アマレヤ」が再びアイヌの人たちと交流できる日が来ることを切に願っています。

（さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授）

* https://www.facebook.com/events/1353668178300049

スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館における

ブロニスワフ・ピウスツキに関する展示

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ

近年、ポーランドの著名な政治家ユゼフ・ピウスツキ（1867~1935）の兄ブロニスワフ（1866~1918）の生涯への関心が高まっています。今までは、民族学者・日本学者・言語学者以外、ポーランドの一般の人々は彼のことをほとんど知りませんでした。いくらアルフレト・F・マイェヴィチ教授らの著書が発行され読まれても、普通のポーランド人はブロニスワフについてアイヌの民族学研究以上のことはほとんど知りませんが、最近制作されたいくつかの本、映画、特別なイベントのおかげで徐々に人気が高まっています。

2018~20年に十分な人気を得た2冊――パヴェウ・ゴズリンスキ Paweł Gożlinski 著『アカン Akan』（ニヴフ語で「兄」の意味）とジグムント・ミウォシェフスキ Zygmunt Miłoszewski 著『価格の問題 Kwestia ceny』――が本屋に並びました。

ゴズリンスキの本は、ブロニスワフ・ピウスツキの生涯、彼の青春、ロマンチックな愛、突然の逮捕、投獄、流刑、サハリンのロシア人、ニヴフ人、アイヌ人の間での冒険、サハリンから日本経由でヨーロッパへの帰国、そして不幸な最後の年を描いています。かなりセンセーショナルな本で、非常に短い文章で書かれ、行動の急転換に満ちています。

一方、探偵小説や映画シナリオの作家としてポーランドで有名なミウォシェフスキは、ピウスツキのサハリン体験を利用して「秘密のアイヌ医学」の物語をつくりました。現代の冒険家たち（海賊も含めて）が癌に効く奇跡的なハーブ療法を探し求めて一儲けを企みます。ミウォシェフスキの物語には本物のブロニスワフはあまり登場しませんが、一般に探偵小説あるいは冒険小説としてよく読まれています。

2018 年には、イエジー・ホチウォフスキ Jerzy Chociłowski 著『ブロニスワフ・ピウスツキの運命との闘い Bronisława Piłsudskiego pojedynek z losem』という本も出ました。これは民族学者の困難な人生経験を描いた読みやすい書物です。

以上の3冊のおかげで、ピウスツキという人物がポーランド人の意識の中に広まるでしょう。

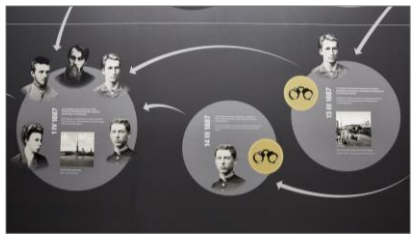
2018 年に日本美術技術博物館マンガが主催した国際会議と、優れた学者による報告を含む2つの美しく徹底的に準備されたカタログの発行は、ブロニスワフ・ピウスツキに関する諸問題についてポーランド人への情報提供に大いに貢献しました。

2020 年、ワルシャワ郊外のスレユヴェク市にユゼフ・ピウスツキ博物館がオープンしましたが*、新型コロナウイルスの大流行のためすべての活動は 2021 年3月まで延期されました。今は2回目のロックダウン実施中で、当館の再開は夏になります。

当博物館にはブロニスワフ・ピウスツキに関するいくつかの展示スペースがあります。

1. 一つ目は大まかにいってピウスツキ家の歴史――リトアニア（当時はロシア帝国領）のズーウフ村の屋敷、ヴィルノ（現ヴィルニュス）の中学校での教育、当時のロシア化政策とそれへの抵抗運動、特にピウスツキ兄弟が組織した地下自主教育サークル「スプイニャ」の説明など興味深い展示があります。

2. ブロニスワフについて一番詳しく語るのは、ペテルブルクとヴィルニュスに関わるアレクサンドル三世暗殺未遂事件、そしてそれを計画した若者たちの裁判とその後のシベリア流刑のことです。暗殺計画はグラフィックで簡単に説明してあります。=上図=



3. しかし一番面白いのは、シベリアでのピウスツキ兄弟（主にユゼフ）の滞在、活動、そして社会主義との接触と、その人間的成長です。=下写真=

ブロニスワフ・ピウスツキの業績について考えるとき、彼はユーラシア大陸の広大な地域の科学的および人道的な探検に貢献した非常に多くの優れたポーランド人の一

* https://www.youtube.com/watch?v=9xTkd3wqCVc

人にすぎないことを覚えておく必要があります。私たちの知る限り、18~20 世紀の間、何万人ものポーランド人がシベリアに移住し、この地域の文明と文化の発展に大きく貢献しました。だからこそシベリアは大変有意義な領域なのです。流刑者のうち何人かはカムチャツカに送られ、日記や興味深い回想を書いた人もいます。=前頁上左写真=

こういう風に、シベリアでのユゼフ、サハリンでのブロニスワフの流刑と活動が、形式は短いけれど、内容は面白く語られます。展示スペースに入ると照明が徐々に暗くなり、スピーカーから録音されたシベリアのシャーマンの声と説明が聞けます。

（Jadwiga Rodowicz-Czechowska, スレユヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館学芸員、元駐日ポーランド大使）

新刊紹介

『エカシの森と子馬のポンコ』
加藤多一(作)、大野八生(絵)

ポプラ社
2020.12

〖少女からおとなになる子馬のポンコを
やさしいまなざしで描く物語〗

この児童書が手許に届き、先ず表紙のあどけない子馬のまなざしと目が合いました。そのイラストのすぐ下の帯の冒頭にはこう記されています。

「当然、“やさしいまなざし”を発しているのは、著者加藤多一さんご自身であり、その多一さんがこれまで有形無形の育みを受けた故郷のご家族や、多くの友人、そしてこの大地と包み込む大気、草や木や虫、動物たち全ての生き物達こそが、やさしいまなざしの大きな相似形とも言えるでしょう。」

著者加藤多一さんとは個人的にも多少交流に恵まれた経緯もあって、リスペクトと同量の親しみの混ざる心持ちが慢心にならぬよう自重しながらも、戦後というエポックを代表する児童文学者、北海道を題材に多くの著作をされた第一人者の加藤多一さんは、私にとっても、多一文学に触れて育った児童生徒たちにとっても、正にエカシのような存在であり、アイヌの歌物語、叙事詩、昔物語の真髄と情動を受け継ぐ大きなお方でもあります。

作中のエカシの辛い記憶やその教示の奥深さ、そしてカメムシの悠久のつぶやき、風の声、水の姿、ふわふわたち、そしてエカシの友達のようなおじじの存在感。それらの揶揄や暗示と、現象は、児童向け故にサクッと太い彫刻刀でえぐってはいますが、多一さんの人生観の強い信念に根ざしていて、傷ついた者たちを見て見ぬ振りは決してしないぞという精神性に貫かれ、一つ一つ、一章一章が生(ナマ)の冷静なサイエンスであり、物事の道理であるなぁと、うなずき、うなずき読みすすみました。

この感想文を書く幸運な機会に、数年前の新緑の季節、多一さんら向学心の高いお仲間と道南へ旅した時のエピソードを一つご披露させていただきます。

上磯のトラピスチヌ修道院の一本坂を登りきった所の遅咲きの桜が見事で、私が思わず花びらに触れようとした時、多一さんが「花芯に触ってはいけないよ。大事なところだからね」と言っておいて、花弁をサクッと噛んで見せました。何事も五感を使って親しむのが流儀の多一さん。=写真右端=

生命の物語を分け隔てなく、タブーや誤魔化し無しで伝え、多数に同調、権威に迎合しないフラジャイルな(壊れやすい)個の尊厳、意識開示へ向かうエカシ多一さんの含蓄ある言葉に触れたひとときでした。

「人が育つための大切ないい土と水そして夢という種子を自分の土地の中に、そっと入れてほしい」と、あとがきにかえた手紙(テマミ)で多一さんはしたためています。この手紙をたくさんの子供たちや、その親、その祖父母、教師や大人たちが受け取ってほしいと心から願うばかりです。

自由の森を作るのは、私たちの暮しの一歩からでもあり、そして北海道開拓という名の 150 年以前の先住へ思い馳せる想像力で、知性豊かな森を繁らせてほしいと願う一冊です。

女性こそ自由に自分の人生を歩んでほしいという、主人公ポンコの女性性に照準を合わせた結びで合点の笑みが漏れました。女性は素晴らしいという多一さんの口癖を思い浮かべたからでしょう。

多一エカシ、ありがとう。

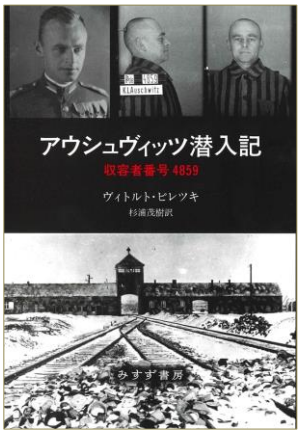
（熊谷 敬子、本会運営委員）

『アウシュヴィッツ潜入記～収容者番号 4859』

ヴィトルト・ピレツキ(著)、杉浦茂樹(訳)

みすず書房
2020.8

第二次大戦が始まった翌年、アウシュヴィッツ強制収容所に自ら志願し、潜入したポーランド人がいた。彼の名はヴィトルト・ピレツキ。1939 年、ドイツ軍によるポーランド侵攻直後、ピレツキは騎兵部隊の一員として戦闘に参加し、11 月にはポーランド軍の地下抵抗組織であるポーランド秘密軍の創設に加わった。



翌年9月、ピレツキはワルシャワ街頭でのワパンカ(人狩り)に自ら出向いて捕まり、偽名を使ってアウシュヴィッツ強制収容所に潜入した。その目的は収容所内に地下抵抗組織を作り、収容所内の情報を武装闘争同盟に届けるルートを確保し、ポーランド亡命組織を通じてイギリス政府を動かし、アウシュヴィッツを解放に導くことだった。

脱走に成功するまでの 948 日間、彼は収容者番号 4859 の囚人となり、そこで過酷な体験をし、非人間的行為を目撃した。それらを証言としてイタリアで『1945 年アウシュヴィッツ報告書』にまとめた。その報告書は英訳され、その英訳書から邦訳されたのがこの『アウシュヴィッツ潜入記』である。

報告書には収容所 SS 隊員の、さらに彼らに操られた一部囚人権力者たちの一般囚人に対する残虐非道な殺戮行為、貨車からガス室に直接連行される人々の様子などが淡々と記されている。淡々とは言っても著者の感情が抑えられているわけではない。ところどころに自身の悲痛な思いもまた記されている。

ピレツキは様々な労務班に所属した。SS 幹部宅のストーブを修繕する班、家具やスプーンを作る木工所や製革所、あるいは囚人に送られてきた小包の管理班、そして脱走直前に潜り込んだのがパン焼き班だった。中でもとりわけ過酷だったのが、収容所の外で肉体労働にあたる班だった。

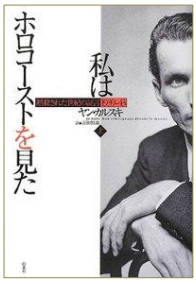
比較的、楽な労務班もあり、その一つが収容所内に作られたオーケストラだった。ナチス幹部にはクラシック愛好者が多かったことから、楽器を弾ける囚人が集められ、まずは男性オーケストラが作られ、その後、女性オーケストラが編成された。他に比べてオーケストラ隊員の生活環境は格段に良く、生き延びる可能性は高かった。それ故に隊員たちはナチス協力者というレッテルを貼られ、それがトラウマとなって解放後も元隊員たちを苦しめた(詳細は拙訳『強制収容所のバイオリニスト』ヘレナ・ドゥニチ-ニヴィンスカ著、新日本出版社 2016 を参照)。

収容所内部での組織作りは少しずつ進み、ピレツキが何度かの危機を乗り越えることができたのは仲間による援護があったからだ。カトリック教徒としての信仰心、祖国を思う強い愛国心もまた支えとなった。しかし、収容所外の無知からくる沈黙は大きな痛手となり、1943 年復活祭に二人の仲間とともに脱走を決行、成功した。

その後、ピレツキはワルシャワで抵抗活動を続け、1944 年のワルシャワ蜂起に参加。その時ドイツ当局に身柄を拘束され、捕虜生活を送った。やがて解放の日を迎えると、唯一の亡命政府軍が残っていたイタリアへと向かい、そこでこの報告書を書いたのである。

ナチス時代を生き延びたピレツキの抵抗活動はこれで終わりではなかった。戦後は反スターリニズムの活動家となり、その結果、国家反逆罪で逮捕され、同胞によって抹殺された(これについては小林公二著『アウシュヴィッツを志願した男』講談社 2015 に詳しい)。W・ピレツキはポーランド体制転換のあと 1990 年に名誉回復された。

第二次大戦の英雄と讃えられているポーランド人はまだいる。ワルシャワ・ゲットーや強制収容所に潜入してピレツキ同様にナチスによるユダヤ人虐殺の目撃者となり、その体験を世界に伝えたヤン・カルスキである。彼の著書『私はホロコーストを見た』吉田恒雄訳、白水社 2012 もまた貴重なノンフィクション作品である。



(田村 和子、ポーランド児童文学翻訳家)

http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE103BooksKumagaiKato.pdf
http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE103KatoAuschwitz.pdf

《新会員のひと言》

アウシュヴィツで考えたこと

加藤 多一

20年ほど前。アウシュヴィツに二回にわたって行ってきた。

まず一回目。なんとか路線バスを乗りついで現地にたどりつくことができた。

バスの窓から見たとき、あっと気がついた。いかにもドイツ語の響きとつながるアウシュヴィツという地名・道路名の標識がどこにも見当たらない。

外国語に弱いから道に迷ったか――焦っているうちに、はっと気がついた。

ここはポーランド国――つまりポーランド語の国なのだぞ。

（その文字がどういう綴りであったか――今はもう思い出せない）

ナチのドイツ国が侵略し暴虐の限りをつくした土地・施設の名を、ドイツ語で覚えていた――このことは、大きなショックだった。単に私が無知であった、ということにとどまらず、いわゆる通称のもつ危険性に思い至ったからだ。

例えば、私の名前を、ケイトホなんて呼ぶ英語圏のどこかの国が現われたら、心底怒るに違いない。

日本人とくに N・H・K は、平気でこういう暴力をやっている。漢字で表記するアジア系の人名を、当然のように音（おん）読みする。

毛沢東をモウタクトウと平気で呼んでいた（母語ではマオ・ツオ・トン?）。現代中国のトップの政治家を、シュウ・キンペイと呼ぶのも失礼なことだ。

漢字文化を伝統としている国（例えば南北朝鮮民族）をオン読みして平然としているのは問題だ。漢字が共通なのでおよその意味がわかるのはありがたいが、こと人名については、アジア人を蔑視しているからこそ始めた日本国の〈アジア太平洋戦争〉の原因と結果をどうとらえるか、という大問題にもつながってくる。

あの戦争を今でも「大東亜戦争」と呼んでいる人物（相当の知識人）に出会って驚いたことがある。聞いてはみなかったが、こういう人はテンノウ制を疑問視することがない。

そして、歴史上の事実を認める人間のことを〈自虐史観〉ナンテいう。

私はいわゆる「新制中学」の一期生であり、いわゆる スミヌリ世代でもある。敗戦の年（断じて終戦ではない）の秋、神聖視されてきた教科書に教師の指示どおりスミをぬったのだ。（奥付にヒノマルの絵があった）

12 歳の子どもでも、はっきりとわかったこと――テンノウヘイカの意志だと強制されてきた教科書は、ウソの固まりだったのだ。

床においてある教科書の上をまたぐだけでも叩かれた。

東条英機氏は原爆を落とされオキナワをアメリカ軍に占領される前に、トツゼン辞職した。敗戦の直後首相になったのは、ヒガシクニノミヤという名の皇族だった。

テンノウを神とあがめる日本人は、家を焼かれ家族を殺されても、たとえ餓死しても、皇族に反抗することはあるまい――という発想だ。これを許せますか。

――話がアウシュヴィツから大きくそれてしまったが、要は私の無知は（そのままにしておけば）もっと人類史上のマチガイに突入する危険がある、ということを強調したいのだ。

ユダヤ人絶滅工場ともいうべきあそこについての、私のもうひとつのショック――

展示に没入している私をじゃまする若者が現われたのだ。大声で話す。肩をつきとばしたり談笑する生徒たち。

カタコトの英語で聞く。

「どこの学校ですか」

「ドイツの〇〇学校です」

大きな驚きだった。

加害国の少年たちが、被害国にやってきて、自国の先輩たちがやった恐るべきことを学んでいる。（もういくらうるさくしてもいいよ）

日本の生徒たちは、南北の朝鮮人の国に学習しに行ってますか――

日本政府はそのための予算を、各学校に配布していますか。

アウシュヴィツ学習のとき、これらのことをも考えてしまった私です。

（かとう・たいち、児童文学作家）

http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE103BooksKumagaiKato.pdf
http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE103BooksTamuraPilecki.pdf

ズビグニェフ・ヘルベルト Zbigniew Herbert 詩集より（栗原成郎訳）

我思う氏（パン・コギト）の終末論的予感

Przeczucia eschatologiczne Pana Cogito

1

我思う氏（パン・コギト）の生涯において
どれほど多くの奇蹟
運命の気まぐれな急転
眩耀（げんよう）と転落があることか
それゆえ彼は苦渋に満ちた
永遠をもつことになろう

旅無し
友無し
書物無し

時間を持て余し
肺を病む人のように
流謫（るたく）の身の皇帝のように

彼は決然として煉獄の
大広場を掃き清めるだろう
あるいはさびれた理髪店の
鏡の前で無聊（ぶりょう）に苦しむだろう

ペン無し
インク無し
羊皮紙無し

幼年時代の思い出無し
世界史無し
鳥類図鑑無し

他の人々と同じように
彼は俗世の習俗に鈍感になるよう
忘却講習会に通うことになろう

天国人事選考委員会は
きわめて正確に機能しており

天国行きの候補者たちの
情欲の残滓（ざんし）を根絶する

我思う氏（パン・コギト）は身を護るであろう
頑強に抵抗して

2

いともたやすく自分の嗅覚を手放す
彼はそれを適度に用いてきたのに
一度たりとも誰かの足跡を嗅ぎつけたりはしなかったのに

同じく惜しげもなく手放す
食事の味覚を
飢餓の味覚を

天国人事選考委員会のテーブルに
耳たぶを置く

現世の生活では
彼は静寂の愛好者だった

ただ
視覚と触覚を
奪わないでほしいと
厳格な天使たちを
説得できさえすれば

この地上の棘（とげ）を
尖った破片を
愛撫を
炎を
海の波の鞭を
肌で感じることができるようにと

山の断崖の松を
早朝祈禱の七つの燭台を
青い筋のある石を
なおつづけて見ることができるようにと

彼はあらゆる責め苦に屈する
優しい説得に屈する
しかし最後まで守り通すだろう
痛みの素晴らしい感覚を

そして焼けただれた目の底の
一対の色褪せた聖像を

3

誰が知ろう
天国の
勤務には
不向きであることを
天使たちに納得させることに
成功するとは

そして天使たちが彼に
草の生い茂る細道をとおって
美しい海の岸辺の断崖の
初原の岩窟に帰ることを
許すとは

（くりはら・しげお、東京大学名誉教授）

=写真= Z. Herbert 1963 ©PAP/CAF/Marek Langda

ピウスツキ蝋管と緊急地震速報チャイム

伊福部 達

私は戦後まもなく北海道沙流郡平取町にあるアイヌの聖地と呼ばれる「二風谷」で生まれた。当時の二風谷は 100 戸ほどの集落で、その住民の約7割がアイヌ系の人たちであった。そこにはアイヌの研究と医療に生涯を捧げたスコットランド出身のニール・マンローという医師がいた。

私の生まれた建物はその医師が住んでいた「マンロー邸」と呼ばれる三階建ての美しい白亜の洋館であった=写真=。マンロー医師の没後、縁あって私の家族が6年間にわたり借り住まいをしていた。

父（宗夫）は、その間にアイヌの重要な儀式である「熊祭り」に興味を惹かれ、その一連の流れやルールの詳細を村の古老たちから聞きだして、後に著書『沙流アイヌの熊祭』1969 として著した。私は物心がつく前に札幌の自宅に移ったが、その後も二風谷アイヌの人たちが時々来てくれたので、その村は何時までも私にとって身近な存在であった。

ピウスツキ録音蝋管の再生

今から、35 年ほど前、私が北大に勤めていた頃、「樺太アイヌ」の歌や音楽が録音された蝋管レコードがポーランドで 73 本も発見されたというニュースが入った。これはポーランドのブロニスワフ・ピウスツキという人類学者が 1900 年代の初頭に録音したものであった。ピウスツキはサンクトペテルブルク大学の学生だった時にロシア皇帝アレクサンドル3世の暗殺計画に連座して逮捕され、ロシア極東の樺太に流刑、つまり島流しにされた。この間、樺太アイヌの酋長の姪と結婚したり学校を造ったりして、樺太に溶け込んでアイヌの風習や文化を記録していたが、蝋管レコードはその中の一つである。

文字を使わないでアイヌ文化を伝えていたのだから、蝋管に録音されている歌や音楽はアイヌの歴史を知る上で極めて貴重な資料である。それを再生して欲しいという依頼が飛び込んできたのである。

それから半年にわたり悪戦苦闘の蝋管再生に取り組むことになったが、その過程と録音したピウスツキの数奇な運命は一つの貴重なドラマでもあった。NHK がこれに興味を持ち、半年間の再生過程は 1984 年に「ユーカラ沈黙の 80 年～樺太アイヌろう管秘話」と題したTVドキュメンタリー番組となった。

緊急地震速報チャイムの制作

この番組から 20 年以上が経過し、私が東大に移って間もなく、その番組のスタッフの一人が「僕のこと覚えていますか」と私の部屋を訪ねてきた。放送で緊急地震速報を出す制度ができたので、そのチャイムを作るのを手伝ってくれないかと頼まれた。震度5弱を超える地震が予測されたら、直ぐに行動を促すようなチャイムを作って欲しいという。

色々な音が頭に浮かんだが、結局、ゴジラ音楽で有名な作曲家の叔父（昭）が作った交響曲「シンフォニア・タプカーラ」の第3楽章の出だしの和音を利用することにした。北海道で生まれ育った叔父もアイヌの音楽に強い影響を受けているが、この曲は興に乗った古老が立って踊り歌う「タプカーラ」をモチーフにしている。この中にある和音を抽出し、それを低音から高音に流れるアルペジオという形にしてチャイムにした。

それは、2011 年3月 11 日の昼過ぎに「チャラン、チャラン」と全国にわたり執拗に鳴り響いた。

*　　*　　*

ピウスツキは 1903 年に平取に一週間ほど滞在した。これをテーマにして 2019 年秋に二風谷アイヌ文化博物館で特別展が開かれることになり、同館から「ピウスツキのロウ管～アイヌ語音声の再生と活用」と題した特別講演を依頼された。迷った末、私が開発したポータブル蝋管再生機で蝋管再生の実演をしながら、ピウスツキが録音した歌と緊急地震速報チャイムを結び付けて一つの物語を作った。

二風谷、ピウスツキ蝋管、地震チャイムは私にとって逃れることができない「キイワード」になっている。

（いふくべ・とおる、北海道大学・東京大学名誉教授）

伊福部昭 シンフォニア・タプカーラ
https://www.youtube.com/watch?v=qVOM9fh_a7k
https://www.youtube.com/watch?v=btK9KK6xvqE

ポーランド人音楽家 JAN KOWALSKI の シベリア孤児救援マンドリン演奏会

引田 秋生

2020 年 7 月 22 日はシベリアから救出されたポーランド孤児の最初の来日から 100 年目でした。日本赤十字社と福田会育児院などによるこの救済活動には全国から多くの支援が寄せられました。以下はその一コマ、あるポーランド人音楽家が日本各地で行った「義捐演奏会」の調査記録です。（編集部）

１．調査のきっかけと経過

ある日、「ロシアの盲目の詩人」と呼ばれたワシリー・エロシェンコに共通の関心を持つ友人が「さっぽろ文庫」にあるエロシェンコ関する以下の記述は間違いではないかと問い合わせてきた。

「大正十一年暮れのある日。この日は朝から猛吹雪で、全市停電。豊平館を訪れる人もなく、ひっそり雪に埋もれていた。突然、どやどやと雪まみれの一団が扉を開けて入って来た。見ると土田明広はじめチルコロ・マンドリニスコ・アウロラ楽団の連中である。その中に、見知らぬ外人がひとり混じっていた。これが、バラライカの名手ワシリー・エロシェンコだった。エロシェンコが、自作の一曲を楽団に献呈したので、彼の歓迎会を兼ねて小演奏会を開きたいのだという。私は早速準備にかかった。」（杉山正次「豊平館とともに六十年」〈さっぽろ文庫 15〉『豊平館・清華亭』札幌市 1980、p.116）

エロシェンコはこの前年、日本を追放され中国に移っており、確かに別人と混同していると思われる。

これについて前川公美夫氏は杉山氏の回想に基づいた自分の誤り（〈さっぽろ文庫 57〉『札幌と音楽』北海道新聞社 1991、p.161）を訂正し、それはこのころ北海道に来て「北大生と親交があったように見受けられる」コバリスキーではないかと推測している（『北海道音楽史』私家版 1992、大空社 1995、p.192）。

この人物については、渋谷忠三氏が道内最古のマンドリン合奏団「北大アウロラ」との関連で「大正十年流浪の楽人、イアン・コバリスキーのヴァイオリンやマンドリンの演奏に刺激され、当時医学生の小河原四郎を中心に「アウロラ・マンドリニ・オルケストラ」を結成したのが事の始まりである。」（『札幌と音楽』p.128）と書き、前川氏も巻末の年表に「大正 10 年…コバリスキー演奏会。ヴァイオリンとマンドリン独奏」（同書 p.318）と記している。

以上から私も、大正 11 年暮れに豊平館を訪れたのはコバリスキーかと考えたが、今回調査した朝日新聞の記事によれば、当時同紙の記者であった土岐善麿らが同年春に故国ポーランドへ帰るコバリスキーを見送っており、この可能性も否定された。

さらに、杉山氏の「自作…を［アウロラ］楽団に献呈した」という回想について北大に現存するマンドリンオーケストラ「アウロラ」に問い合わせたところ、残されている当時の新聞記事や回想からこの人物はロシアの亡命音楽家アレキサンダー・ドブロホトフと判明した。

これで杉山氏の勘違いは解決したが、それではこのコバリスキーなる人物は何者だろうか、ということが私の関心事となった。

山形県酒田市における義捐演奏会（1922.1.10、酒田高等女学校）のチラシには「補助 ポーランド公使館」とあり、ポーランド大使館や、北海道ポーランド文化協会にも問い合わせたが詳細は不明だった。

その後、同協会の紹介で埼玉大学名誉教授澤田和彦氏から重要な資料―外事警察の資料と朝日新聞に四回にわたり掲載された「土岐生」の記事「漂泊の楽人を送る」―が寄せられ、この資料からイアン・コバリスキーがポーランド人（当時 37 歳）で、日本各地でシベリア孤児救援の慈善演奏会を開いたことがわかり、ポーランド語では Jan Kowalski と綴ることも教えていただいた。

朝日新聞の他に当時の演奏会の様子を伝える新聞記事を探したところ、東京紙（朝日、読売、萬朝報）以外にも地方紙（函館、小樽、北海タイムス）で詳しく報道されており、一定の人物像が浮かんできた。

２．Jan Kowalski 来日の経緯

「漂泊の楽人を送る」（二）によれば「欧州戦争では陸軍中尉として活躍、左手に貫通傷を負って赤十字病院に収容されているとき、ロシア革命にあい、シベリヤの姉を訪ねて故国を離れた。ハルピンやウラジホをマンドリンを抱えて彷徨い、流れ流れて青島に来たとき、演奏会で貿易商と知り合いになり、二千円の「見せ金」を借りて日本に上陸したが、上陸時には懐に二銭しか残っていなかった。」（朝日新聞 1922.5.30）

=写真 コバルスキー氏= 朝日新聞 1922.1.20 より

３．マンドリン奏者、作曲家として高い評価

新聞記事では「マンドリン大家」「マンドリン名手」という見出しが多い。1906 年世界マンドリン大会でイタリア人大家を破り優勝、イタリアのプッチーニと並び称される作曲家などの記述もある。ドイツの蓄音機会社からマンドリン独奏のレコードが出ているとも報じられている（萬朝報 1921.10.17）。

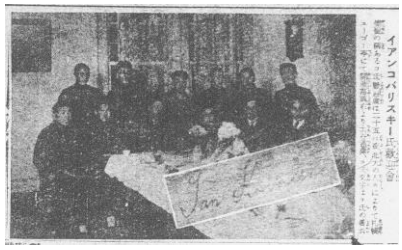
東京での演奏会の入場料を比較して、独奏としては他の有名音楽家に劣らない金額だとも評価されている。東京の演奏会では、イワノフ作曲の「ドムカ・シベリイ」のマンドリン独奏が五回のアンコールがあったり、演奏会の締めは自身作曲の「ポーランドマーチ」の独奏をしている（函館新聞 1921.11.24）。

４．日本各地で演奏会（1921~22）

「マンドリン名手コバリスキー氏来京　10 月 26 日、27 日に帝国大学（東大）基督教青年会館にて演奏会　ポーランド公使館補助の下　母国のシベリア孤児救済のため。」（読売新聞 1921.10.17）

「東京第一回演奏会の後は、東北大学（仙台）、盛岡、千葉、慶応大学（東京）、秋田、弘前を経て、函館では 26 日、札幌 27 日、小樽 28 日、その後は、新潟、長野両県で演奏し、関西方面に向かう予定。」（函館新聞 1921.11.22）

「マンドリンの世界的名手イアン、コバリスキイ氏の音楽大演奏会は来る 27 日正午 12 時から当区美萬寿館に於て開催さるるが氏のマンドリンは全く天才的で到底尋常人には学び得ぬ二重三重乃至四重音を聴取し得る奇跡的技量を有し居り〈中略〉因に当日午後6時から氏の講演会及び歓迎会を豊平館に開く由」（北海タイムス 1921.11.27）



=写真 北大の人々によるコバリスキー氏歓迎会(11.25)
文字はコ氏の署名= 北海タイムス 1921.11.30 より

５．生い立ちは謎

報道されている演奏技術や作曲能力から、ポーランド国内でそれなりの音楽専門学校で学んだか音楽家に師事したと推測され、陸軍中尉という階級も一定の学歴を思わせるが、これらについては新聞記事にも、ポーランド国内からも情報はない。記事からエスペラントの会話もある程度出来たことが窺えるが、どこでどのように学んだかは不明。

*　　*　　*

以上はあくまでも当時日本国内で報道された情報で、その内容はポーランド国内では裏付け資料は得られていない。ロシア革命の混乱の影響や、Jan Kowalski がポーランド人にはあまりにもありふれた名前で偽名の可能性も否定できないことなどが調査のネックになっている。

何とかして海外の情報を得るため、ドイツでレコードを出したという記事を手がかりに、ドイツ語翻訳者を介してドイツ国立図書館やグラモフォンなどに照会し、関係資料の調査を続けていきたい。

（ひきた・あきお、山梨エスペラント会会員、筑波大学附属視覚特別支援学校元校長）

ポズナン市エスコラピオス会聖ヨゼフ・カラサンス高等学校 第２回「HAIKU―日本の詩形」コンクール(2021)入賞句

選評（コンクール組織委員会 津田晃岐，日本語訳）

昨年同様、パンデミアの中、メールやチャットなど遠隔教育ツールを利用したコンクールとなった。期間は2月 18 日～3月 15 日、冬または春に材を取ったポーランド語の五七五を募集した。応募数は 18 句。季題は時候から生活、動植物まで実に様々（暖炉、毛布、節分草、鈴蘭、帰雁、兎など）。句の内容も、風景への感動や、自身の感覚（視覚、聴覚、触覚など）に注目したもの、呼び覚まされた記憶の告白など、非常に豊かだった。

その中で入賞句は静かな眼差し、新鮮な発見、ありありと浮かぶ描写、そして何よりポーランド語らしい「切れ」の鮮やかさで特に目を引いた3句である（その鮮やかさを日本語に移すのに、訳者は苦労することになった）。

（つだ・てるみち、聖ヨゼフ・カラサンス高校日本語教員）

samotna chatka	小屋独り
skryta pod płaszczem śniegu	雪かぶり―そこ
chcę się tam ukryć	隠れたい

Dominika Jopek, 2A po g
ドミニカ・ヨペク、２年 A 組（三年制）

pszczoły wróciły	蜜蜂の
jak boleśnie żądliły	戻れば痛き
nikt nie pamięta	針忘る

Franciszek Wytykowski, 2A po g
フランチシェク・ヴィティコフスキ、２年 A 組(三年制)

na szybie mróz	窓ガラスに
misterne wiersze pisze	寒気 詩を描(か)く―
ja je przepiszę	書き写そう

Marianna Minksztym, 2D po g
マリアンナ・ミンクシュティム、２年 D 組(三年制)

新刊紹介

『サハリン島』

エドゥアルド・ヴェルキン(著)、北川和美・毛利公美(訳)

河出書房新社
2020.12

淡々とした語り口に支えられた異常な世界の描写

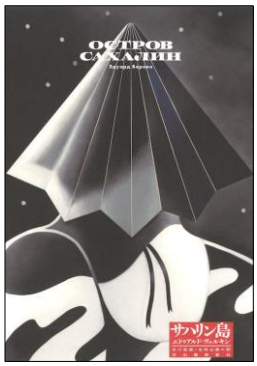
『ゴールデンカムイ』とチェーホフの『サハリン島』を現代風にした SF 小説かと思って読むなら、いくぶんかは当たっているが、そんな読者の想像をさらに超えたとんでもないところまで連れていってくれる。

最近ピウスツキ関連の書籍が続けて出たこともあり、サハリンへの関心が高まっていると思われる中、監獄と凶悪な脱獄囚。海と山と森、野生の熊、移民の集団と虐げられる先住民族というおなじみ(?)のサハリン・樺太の風景が、ゾンビ、放射能汚染、人間(とりわけ中国人)の死体を原料にした究極のリサイクル産業、民衆の不満のガス抜きとして実施される人種差別的な「ニグロぶちのめし」(ただし白人もニグロに分類される)など、想像力のドーピングとでもいうような過剰な SF のアイディアで埋め尽くされるのだ。

実は今年の2月、日本語訳の刊行にあわせたオンラインのイベントに著者のヴェルキン氏と翻訳者の北川和美氏・毛利求美氏を招いて講演していただく機会があった。とんでもない小説のインパクトとは裏腹に、たいへん知的で穏やかな人柄の方である。芥川や三島から、小松左京のような SF 作家や特撮映画まで、日本の文化にお詳しいのだが、ロシアの知識人としてはそれほど並外れてはいない。多くのロシア人が抱く、少し理想化されたきらいのある日本のイメージを煮詰めて蒸留すると、こんな怪物ができあがるということだろうか。これまで主に児童文学やヤングアダルト小説を書いており、大人向けの作品はこれが初めてなのだそうだ。

主人公は日本人とロシア人の親を持つ女性だが、聴衆からの感想のひとつで、一人称の語り手の性別が、しばらく読み進めるまで分からなかったというものがあった。確かにそうなのだが、アクション場面の多い小説なのでヒロインが男性的あるいは中性的に描かれるという訳でもない。翻訳の文体のせいもあるかもしれない(ロシア語原文は女性形があるのですぐに性別が分かる)。しかしどうも作者は主人公の性別を小説のプロットにとってもそれほど大きな意味をもつものとは考えていない節がある。

そういえばチェーホフの『サハリン島』も、語り手の性別が特に読者に訴えるものはない。同じタイトルでも全く異なる印象を与える二つの作品だが、記録文学的に淡々としながら、好奇心旺盛なところもあるという語り口と視点が、異常な世界の描写を支えているところは共通しているのかもしれない。



最後になって申し訳ないが、サハリンが舞台とはいえ、ポーランド人は登場しない。

(越野 剛、慶應義塾大学准教授、本会会員)

ポーランド&ニッポン歳時記 35

エラン・ヴィタール

私の子供のころの思い出の一つは、田舎に住むお祖母ちゃんの薔薇の庭で遊んだことです。その影響か、私たちもベランダに薔薇を一株植えました。ピンク色の薔薇で、花言葉はポーランド語で「友情」です。初めての冬、暖かくなりかけた２月の末に、薔薇を包んだ藁囲いから新鮮な葉が一枚顔を出したのです。

ciepły dzień pierwszy	もう温し
znad chochoła wyrasta	藁囲いから
świeży liść róży	ばら若葉

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

ogród za domem	裏庭の
w zieleni kos ukryty	茂みか　歌鳥
wita poranek	朝を告ぐ

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

曲水や赤褌の一茶ゐて

京よりの妣の持参の雛の軸　(妣(はは)＝亡き母)

OH！出たか野辺のごちそうフキノトウ

岩見沢市、霜田千代麿

御茶の水書房
2020. 8

『樺太における日ソ戦争の終結～知取協定』

ニコライ・ヴィシネフスキー(著)、小山内道子(訳)、白木沢旭児(解説)

「知取協定」とは、1945 年8月 22 日、樺太東海岸の知取町（現マカーロフ市）でソ連軍と日本軍司令部代表により南サハリン（樺太）の戦闘停止に関し締結された協定で、本書の原題となっている。

戦後移住してきたサハリン州住民向けの概説書

著者ヴィシネフスキー氏は 2008 年ユジノサハリンスクで行われた日ロ合同シンポジウムでの北大・白木沢旭児教授の報告「樺太における終戦」によって初めてこの協定の存在を知ったという。

ソ連軍のサハリン侵攻作戦の目的は対独戦の戦勝国として、日本軍国主義の壊滅と、樺太・千島の占領達成だったから、日ソ戦争に関するソ連の出版物ではサハリン島における戦闘の完了は、ソ連軍の樺太南部への英雄的な攻撃作戦の成功による日本軍壊滅の結果とされた。既に満洲においてヴァシレフスキー・秦会談による日本軍の無条件降伏の合意があり、日本軍の無条件降伏は当然のことで、知取協定は公文書としては保存されなかったのだろう。

しかし、著者はこの停戦協定があったからこそソ連軍の南サハリン侵攻作戦が完了し、何百という犠牲者を未然に防ぐことができたと高く評価する。

そしてこの協定と「知取町」を記念しアピールするべく本書を執筆したのである。そのため日本側の多様な資料を入手し、ロシア人翻訳家の援助を得て読み込み、数年かけて4章から成る本書を完成させた。膨大な数の注がつているが、理論的な学術書ではなく、戦後大陸から移住してきたサハリン州住民のために、「知取協定」を含め意外に知られていない日ソ戦争の経緯を、写真を多用してルポルタージュ風の概説書として執筆したのである。

翻訳者・紹介者としての関心と夢

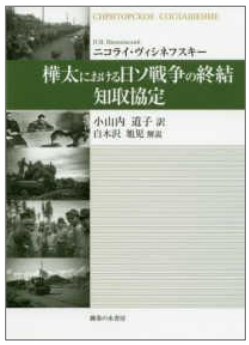
2017 年北大で、著者は「サハリン・樺太史研究会」の招聘による「“知取協定”と樺太における戦争の終結」という報告を行い、「知取協定」締結をめぐる状況と協定内容を紹介した。

訳者はこのとき通訳を務め、その後、既に出版されていた本書を通読した。最も興味を惹かれたのは、第1章「南サハリンをめぐる避けがたい戦闘」だった。ここには日露戦争の結果失った南サハリン（樺太）を取り戻すことを目指すソ連側、スターリンの野望が具体的に述べられている。本書を翻訳・紹介したいと考えるきっかけとなった、樺太侵攻に関するソ連の基本的スタンスである。

スターリンは 1920~30 年代のソ連極東における軍事的建造物すべてを日本との戦争準備に向けて築造した。それは 1939 年のノモンハン事件（ハルハ河戦争）の関東軍の大敗に反映された。

ただし、この事件後の世界史の流れは、極東を逸れた予想外の激流となる。同年8月に独ソ不可侵条約が締結された直後、ドイツはポーランドへ侵攻、これに抗した英仏の対独宣戦布告により第二次世界大戦が開始された。その直後に日独伊は三国同盟を締結、さらに 1941 年4月の日ソ中立条約締結へと続く。ところがドイツは同年6月、独ソ不可侵条約を破ってソ連侵攻を開始する。全く晴天の霹靂、無防備なソ連は以後約4年にわたり国家存亡をかけ、死力を尽くした総力戦を強いられる。

この間日本は同年 12 月、真珠湾攻撃により対米戦争の泥沼へ踏み出す。日独伊との戦争を共に戦う英仏中米とソ連は、今や連合国として連携を深めていく。アメリカは 1941 年から「レンド・リース法」他によりソ連を含む連合国に武器、食料、衣類など膨大な物資の援助を行い、1945 年2月「ヤルタ会談」で F・ルーズベルトはソ連に対日参戦を強く要請する。満洲には 100 万の関東軍が残っており、米軍が沖縄、日本本土への上陸作戦を行うには、数十万米兵の犠牲が予想されたからである。



秘密協定では、ソ連はドイツ降伏後3か月以内に参戦し南サハリン、千島列島を占領、領有することとされた。この密約はスターリンにとって独ソ戦の試練を乗り越えた後の千載一隅のチャンスだっただろう。2か月後ソ連は日本に日ソ中立条約の不延長を通告、対独戦に余力が出た分、日ソ戦の具体的準備を加速させる。日ソ中立条約破棄は既に予定されていたはずである。ソ連の満洲、樺太侵攻は独ソ戦の壊滅的消耗により疲弊したソ連単独では不可能で、連合国の要請・連携とレンド・リース法の援助があって初めて遂行できたのである。

日本がドイツ降伏後1、2か月以内に降伏していたら、原爆投下もなく、樺太、千島も日本領のまま残っていたはずだという夢は楽しい。

（小山内 道子、翻訳家、サハリン・樺太史研究会会員）

最新デジタル・リマスター版４月 10 日～東京はじめ 関東・関西で公開！

クシシュトフ・キェシロフスキ監督 生誕 80 年／没後 25 年記念イヤー

ポーランド映画の金字塔 『デカローグ Dekalog』

「デカローグ」は「十戒」を意味し、旧約聖書を踏まえ、現代に生きる人々の日常生活の地平に存在する孤独と愛の苦悩を鮮やかに描き出す心揺さぶる珠玉の十篇

〈誰の人生でも探求する価値があり、秘密と夢があると私は信じているんだ〉*キェシロフスキ監督*

*1988 年｜ポーランド作品｜計 587 分｜カラー 札幌公開を期待！

2021 年夏のイベント

第 10 回「午後のポエジア」(オンライン)、ポーランド名画(ビデオ)鑑賞会などを企画中

会員動向(2020.12~2021.4、敬称略)

入会:加藤多一、北浦由花里
退会:長谷川麻里香
逝去:大賀美紀子さん、渡辺宗子さん
(謹んでご冥福をお祈りします)

ご寄付ありがとうございます(敬称略)

(2021.1~3、1口千円)(7)霜田英麿

2021 年度(2020.9~2021.8)会費納入のお願い

年会費 (一般 3,000 円、学生 1,500 円)
また、維持会費としてご寄付(1口千円)も承ります。
【ゆうちょ銀行振替口座】記号 02740 5 番号 19735
【加入者名】北海道ポーランド文化協会 または
[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座]
[店番号]028[口座番号]0605084
[名義]ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚

※ご請求額は個別の納入依頼文(振替用紙同封)をご覧ください。
※遠方の方は、ご寄付年 1,000 円で、会誌 POLE の定期贈呈も承ります。事務局にお問合せください。

POLE103 目 次

『エクソドゥス』プロジェクトの成果と今後の協力の展望(「シロンスク」舞踊団団長ズビグニェフ・チェルニャク、Mirosław Błaszczak&安藤厚訳)…… 1
『エクソドゥス』頌歌 ode オード(長屋のり子)…… 3
アイヌ民族とポーランド人～現代ポーランドと日本にピウスツキは何を遺したか〈ウェブセミナー〉(先川信一郎)…… 5
スレユヴェク市ユゼフ・ピウスツキ博物館における B・ピウスツキ関連展示(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ)…… 6
《新刊紹介》『エカシの森と子馬のポンコ』加藤多一作、大野八生絵(熊谷敬子)…… 7
『アウシュヴィッツ潜入記』ヴィトルト・ピレツキ著(田村和子)…… 8
《新会員のひと言》アウシュヴィツで考えたこと(加藤多一)…… 9
ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より「我思う氏(パン・コギト)の終末論的予感」(栗原成郎訳)…… 10
ピウスツキ蝋管と緊急地震速報チャイム(伊福部達)…… 11
ポーランド人音楽家 JAN KOWALSKI のシベリア孤児救援マンドリン演奏会(引田秋生)…… 12
ポズナン市聖ヨゼフ・カラサンス高校「HAIKU」コンクール 2021 入賞句(津田晃岐)…… 13
《新刊紹介》『サハリン島』エドゥアルド・ヴェルキン著(越野剛)…… 14
ポーランド&ニッポン歳時記 35(津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)…… 14
《新刊紹介》『樺太における日ソ戦争の終結～知取協定』N・ヴィシネフスキー著(小山内道子)…… 15

発行 北海道ポーランド文化協会
〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com
東京事務所 〒107−0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画㈱ 霜田気付
電話 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

ポーレ編集委員会
新井藤子／氏間多伊子
熊谷敬子／塚本智宏
松山敏

* http://www.ivc-tokyo.co.jp/dekalog/

POLE no.103 (May 2021)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Achievements of the "Exodus" project and prospects for future cooperation
(Zbigniew Cierniak, Direktor, Zespół Pieśni i Tańca „Śląsk” im. Stanisława Hadyny) 1
Ode to the spectacle "Exodus" (N. Nagaya) 3
Webinar “The Ainu people meet the Poles. The legacy of Bronisław Piłsudski in contemporary Poland and Japan” (S. Sakikawa) 5
Exhibitions related to B. Piłsudski at the Muzeum Józefa Piłsudskiego w Sulejówku (Jadwiga Rodowicz-Czechowska, Curator of Programs Related to Bronisław Piłsudski) 6
(New Books) “Ekasi Forest and Pony Ponco” by Taichi Kato (text), Yayoi Ohno (illust.) (K. Kumagai) 7
“The Auschwitz volunteer: beyond bravery” by Witold Pilecki (K. Tamura) 8
New member’s message: What I thought about in Auschwitz (T. Kato) 9
“Przeczucia eschatologiczne Pana Cogito” by Zbigniew Herbert (trans. by S. Kurihara) 10
B. Piłsudski’s wax cylinders and the Earthquake Early Warning Chime (T. Ifukube) 11
Charity mandolin concerts by Polish musician Jan Kowalski for the Polish orphans rescued from Siberia to Japan (A. Hikita) 12
Excellent poems at the contest "Haiku - poezja japońska" 2021 at St. Joseph Calasanz High School in Poznań (translated by T. Tsuda) 13
(New Books) “Ostrov Sakhalin” by Eduard Verkin (G. Koshino) 14
Haiku Yearbook: Poland & Japan 35 (M. Tsuda, P. Wrzeciono and Ch. Simoda) 14
(New Books) “Siritorskoe soglashenie” by Nikolai Vishnevskii (M. Osanai) 15
The glorious monument of Polish cinema “Dekalog” 1988 by Krzysztof Kieślowski 16